



明治期の神戸病院 : その後の資料から (歴史)

住野, 公昭

(Citation)

神戸大学医学部神緑会学術誌, 2:85-89

(Issue Date)

1986-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81007026>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007026>



明治期の神戸病院

——その後の資料から——

神戸大学医学部公衆衛生学教授 住 野 公 昭

昨年の創刊号に、明治初期の神戸病院にかんして若干の資料にもとづいて解説した。その中で京都の究理堂文庫（大阪市大・小石秀夫教授管理）に神戸病院に関する写真等が保存されていることに触れた。今回その資料の紹介とその後入手した史料について解説する。

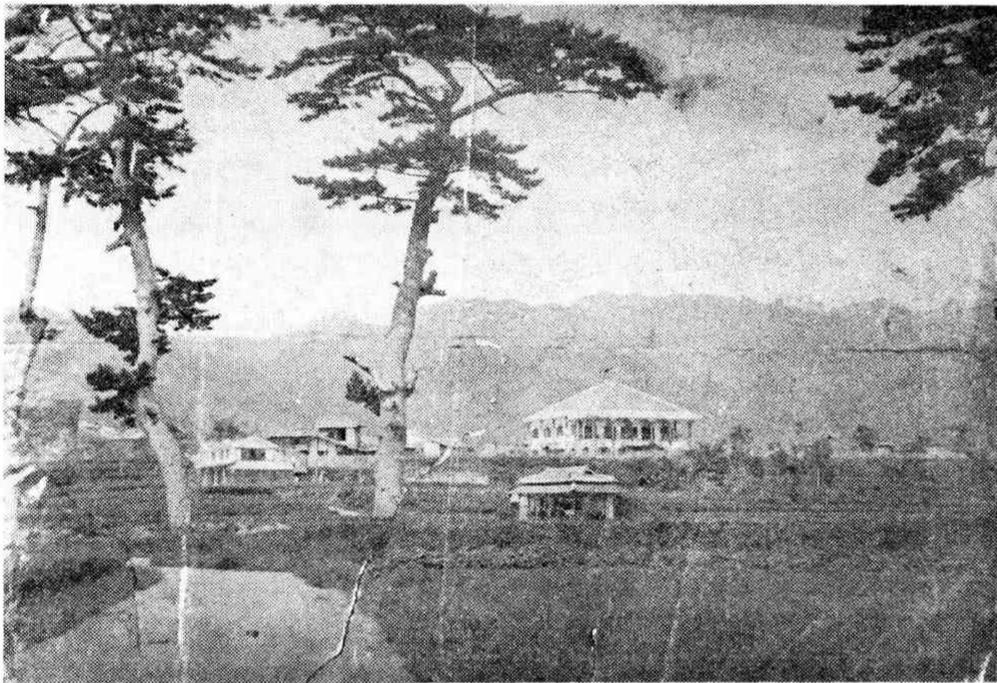


写真1 明治6—7年頃の神戸病院遠景（究理堂文庫所蔵）

写真1は前号の写真2と同じ方向から、しかし場所と時間が明らかに異なる神戸病院である。松の木の間、前号の写真では建築中であった解剖所と思われる建物が完成しているのが見える。写真の持主であった小石二郎（1850—1908）は、明治10年6月にオランダ医 Heyden と共に県立新潟病院より赴任している。この写真は赴任後に入手されたと思うが、同時に保存されていたもう一枚の病院写真が前号の写真4とまったく同一であることや、周囲の状況から撮影時期は明治6—7年頃と推定される。本写真を前号の写真と見比べて頂きたい。

写真2は骨髄標本写真と解屍状況写真をこちらで一枚にまとめたもので、裏面にはそれぞれ“明治十年頃神戸病院？骨髄”“神戸病院ニ於ケル解屍”と記されてい

る。写真は相当に不鮮明であるが解剖台には人頭が二つ、周囲には少なくとも10人が写っており、左の執刀者と思われる人物の服装は羽織袴に袴掛けである。写真3は明治11年2月16日付で小石二郎が神戸病院副院長に昇任した時の辞令である。12年9月リウマチのため一時

退職し翌年9月復職、明治14年10月1日依願退職、岐阜医学校に転じている。以後明治18年京都にて開業、明治41年2月59歳で没した。

前号でもふれたが、明治15年甲種医学校に認可された神戸医学校は、明治21年廃校となった。この際、佐野が学校の存続を強く知事に進言したが入れられず、退職して佐野病院を開設したこともふれた。過日、現佐野病院（垂水区）の院長佐野馨先生（誉の御尊孫）をお訪ねし改めて「佐野誉回想録」（昭12年、発行人佐野實）を御寄贈頂

いた。現在残り部数の少ない限定本であるが、その中に当時の状況が回想されている。

佐野誉（1856—1940）は静岡県出身で明治18年、17名の同期生と共に大学東校（東大医学部前身）を卒業している。恩師ベルツ教授が佐野の健康を心配し、気候の好い所と神戸医学校から教授を求めていることから、一等教諭として推薦した。明治18年11月来任し、婦人科と解剖学を担当した。当時の神戸医学校は今の相生町（三越付近）にあり、生徒数400名、教授5名（神田校長、富永、神中、杉田、佐野）であった。佐野は明治19年避病院（中央市民病院の前身）の医長も兼務、開業試験委員の囑託等多忙を極めたという。その頃から財政負担の理由で県会に医学校廃止の説が現れ、佐野の再三の建議に

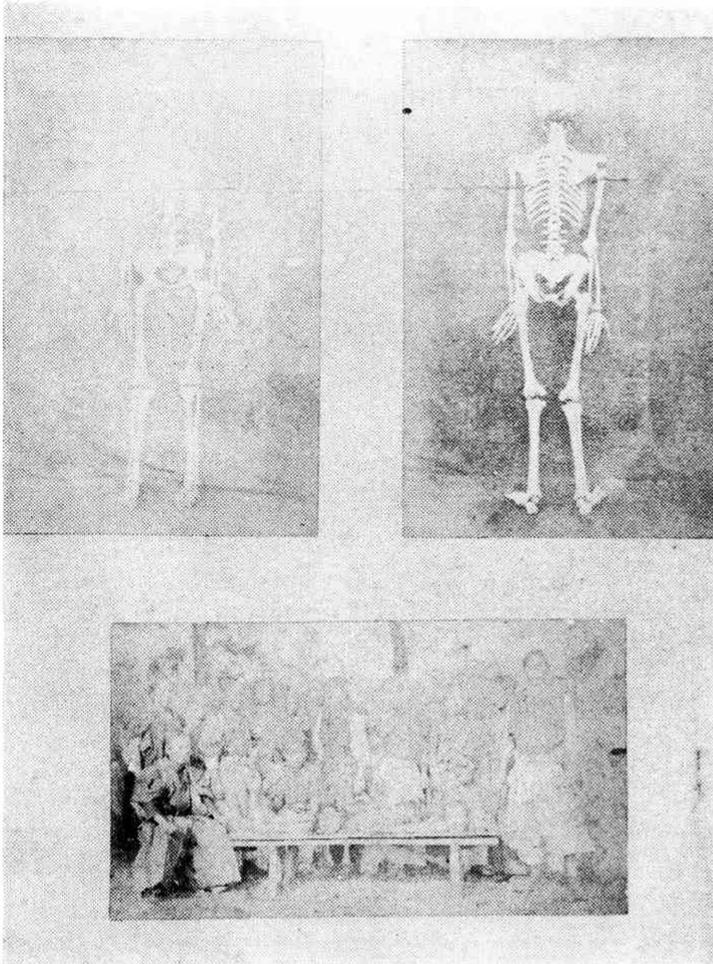


写真2 明治10年頃の神戸病院の骨骼標本写真（上）と解剖写真（下）（究理堂文庫所蔵）

かかわらず明治21年3月廃校となった。もし、甲種医学校の神戸医学校が存続していたら名古屋、京都の医学校と同様に後に医科大学にまで昇格したであろうに、後々まで千載の恨事として残念に思うと述べている。校友の後藤新平（当時内務省衛生主任）の情誼で長崎医学校への転任がきまっていたが、兵庫県令内海等の強い開業の勧めにより明治21年4月北長狭通りに病院を設立した。当時の神戸医学校卒業生である河本後進、内田伴三郎、長沢亘（前号で神田知二郎記念の碑を昭和12年に再建立したことは述べた）の三人が“医学校時代の佐野先生”を回想している。卒業から50年経過した昭和10年の談話であるが、医学校廃止絶対反対を叫んだのは佐野先生であった。しかし、校長（神田知二郎）が温厚篤実で、反対運動の第一線に立つには不適當な人であったためにこの反対運動が沙汰止みになったことは実に遺憾千万の事であったと述べている。なお、この3人と殆ど同時期に在籍していたと思われる山中玄二（27年卒山中陽一、32年卒山中昭夫両先生の御祖父）が、父業三（漢方医）宛に差し出した封筒を写真4として掲載させて頂いた。残

念ながら手紙の内容は不明である。

佐野譽が在職した頃の病院が明治初期に建築されたものか、その後再建があったか資料はない。しかし明治期の写真を多数収集保存されている荒尾親成氏（元神戸市立美術館長、元市立南蛮美術館長）のお宅を伺ったところ、明治期のそれも現在の楠町に移転（明治33年）する前と思われる神戸病院（写真5）と神戸梅毒病院（写真6）の写真が見つかった。撮影年次不明の絵葉書風の写真で、横の説明には下山手7丁目とあるが、明治初期の初代の病院とは明らかに異なる。写真7は荒尾氏が紹介している“神戸を描いた絵”の一枚で武文彦氏11才の思い出画として兵庫県立病院の正面が描かれている。添書に明治26年とあり、先の病院正面と類似しているが、玄関前のソテツが画かれていないところを見ると写真7は写真5より以前のものかもしれない。なお写真5のソテツ群を見ると現在の病院前のソテツとも似ており、もし移転に伴って楠町に移植されたとするとなら明治の唯一の遺物かも知れない。

さて、前号でも触れたが、江馬坂に存在していた江馬病院の状況と旧神戸病院（下山手にあった病院）の最後の院長であった江馬賤男の詳細が判明した。ジョセフ彦（1837—1897、播磨町出身、米に漂流後、日本人最初のカトリック洗礼をうけた。近代新聞の創立者）の研究者として名高い近盛晴嘉氏（元読売新聞論説委員、元帝塚山短大教授）にお会いして江馬氏の情報を知りえたのは誠に偶然であった。

前号で触れた京大教養部図書館蔵の明治期神戸病院の写真は、実は近盛氏が神戸病院ではなかろうかと判定し、下山手通りに生れ育った氏が再山道の道標を先の荒尾氏と共に見つけたのがきっかけである。近盛氏はジョ

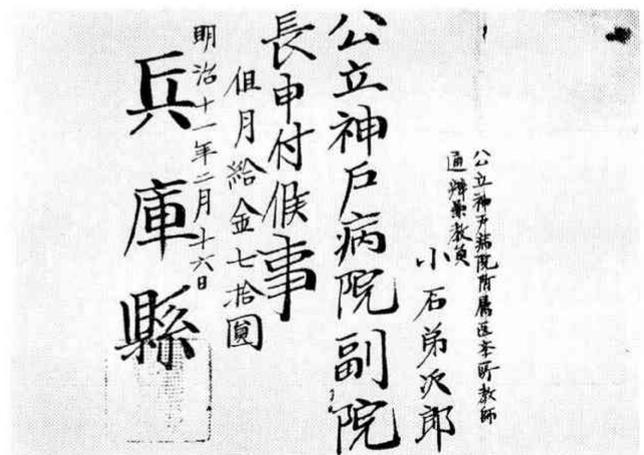


写真3 小石弟次郎（本人の履歴書は第二郎）の副院長昇任辞令（究理堂文庫所蔵）

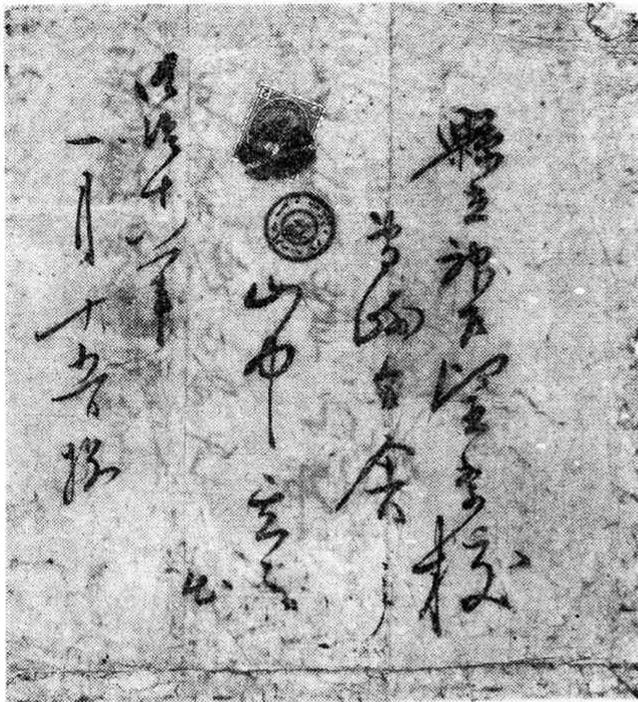


写真4 本学第2外科出身山中陽一先生御祖父山中玄二が県立神戸医学校在学中に父宛に出された封筒裏（明治18年）

セフ彦の研究中、彦が神戸を再々訪問し、伊藤博文や初代病院長のヴェーダー（Vedder, A. M.）とも親交があり氏名不詳の外人写真を鑑定中に藤田氏（京大教養部化学教室）から話もちこまれたそうである。この間の経緯は近盛氏発行の「浄世夫彦」誌15、16、17号にくわし

いので割愛するが、その氏が、自身管理者である春日野墓地の無縁塚を改葬する際、医学研究教育用にと江戸期の人骨の一部を第一解剖学教室に寄贈されたのが、お会いしたきっかけである。氏は偶然にも江馬病院の近くで生れ育ち、江馬病院の御尊孫が大垣でご健在という話である。早速連絡をとり、一月の終わり大垣のお宅を伺った。

江馬家は代々大垣市の蘭学医家で、江馬賤男（1862—1923）は、五代目江馬元義の弟江馬春琢の養嗣子である。現在の当主江馬庄次郎氏は賤男の養嗣女つねの長男で、正に江馬坂にあった江馬病院で生れ育った神戸っ子であった。本家の事情で、現在庄次郎氏が本家養子となり、江馬家に伝わる資史料を保存管理されている。江戸中期から幕末明治にかけての文書類を集めた「江馬家来簡集」によれば、江馬賤男は明治20年東京帝国大学医学部を卒業、直ちにベルツ教授の助手となり、明治23年29歳で静岡病院長に就任した。明治25年県立神戸病院副院長に就任、27年院長昇格、31年病院新築移転地問題で県知事と意見対立し辞任。花隈で開業し大いに盛況を極め、明治36年神戸病院跡地付近、下山手通八丁目に江馬病院を新築移転した。その後盛業で持続し、灘区原田に豪壮な別宅を設け趣味広く一級品を収集し大正12年脳出血で死亡、先の春日野墓地に葬られた。来簡集には明治25年1月13日付の後藤新平（当時衛生局長、後外務大臣、東京市長、内務大臣等）からの書簡があり、神戸病院赴任の決心がつかないようだが、質問に対する回答として現院長は高橋、病院は県立であって学校なし、

生徒なし、就職年限なし、俸給月額140円也とするされている。本書簡もさることながら、誠に興奮を覚えるのは大正10年頃に自筆で書かれた自叙伝が墨痕生々しく保存されていることで、相当な大冊であったが神戸病院に関する部分を複写させて頂いた。

静岡病院長であった明治25年1月（前記の手紙を受けとった前後）顔面丹毒に罹り九死に一生を得た快復期に、後藤新平の紹介状を携えた兵庫県知事周布公平が面会を求め、神戸病院への転任勧誘の面談をしている。静岡病院の好収支、名

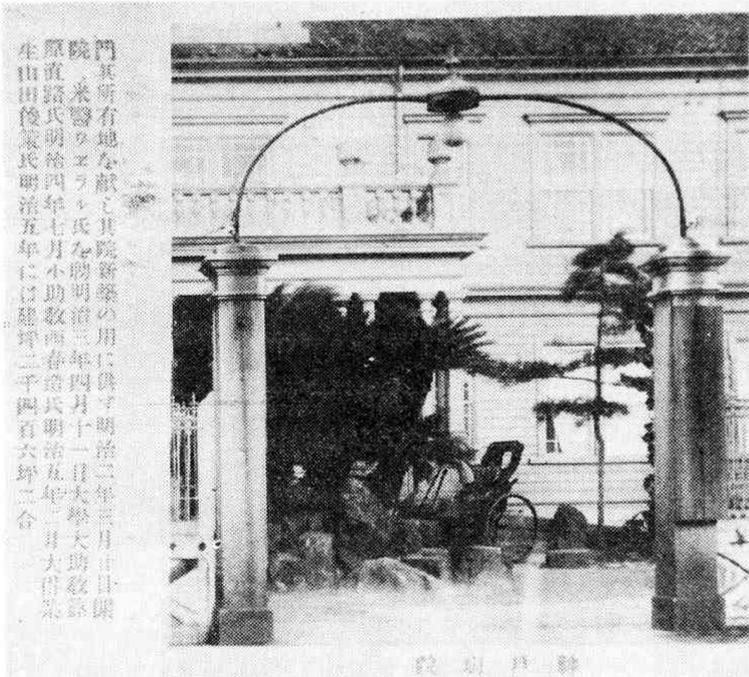


写真5 明治期の神戸病院（年代不明）（荒尾氏所蔵）

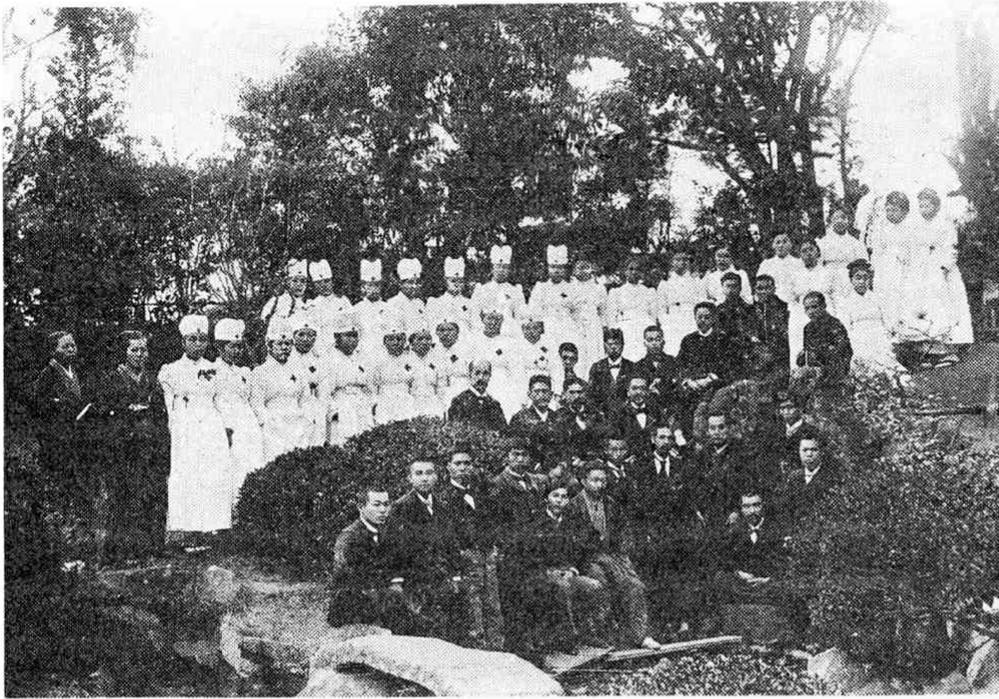


写真8 明治26—7年頃の神戸病院の職員写真（江馬氏所蔵）

列看護婦の前に坐す左から二人目である。

辞任を決意した後任に赤沼新吉、一年後に鈴木徳男が姫路病院長より転じ、三代の院長を経て病院移転が完成したという。なお江馬院長在任中明治28年5月から8月まで正岡子規が神戸病院に入院したが、その様子は“兵庫県病院協会会報”（昭和60年4月号）に金光邦三氏がくわしく書かれているので一読願いたい。

辞任後の江馬は直ちに花隈町の自宅を改築し、明治31年4月江馬内科院を開業、新工夫を施し大いに繁盛し明治36年旧病院の跡地を購入し江馬内科院を新築した。写真9はその新築時の写真で、手前の空地は当然旧病院の

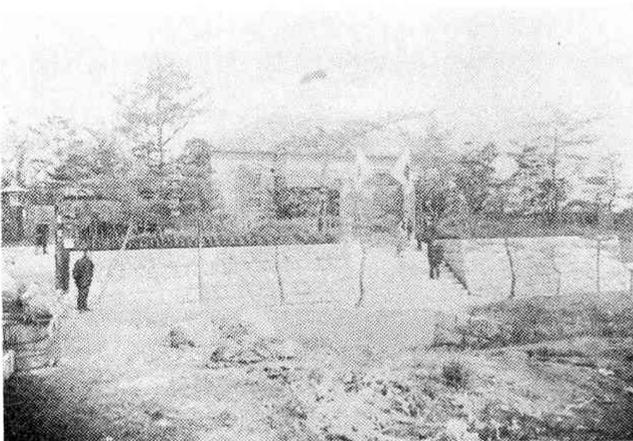


写真9 神戸病院跡地に新築された江馬内科院（明治36）（江馬氏所蔵）

跡地と思われ、内科院の前の坂は後年江馬坂と呼ばれ、医院は昭和10年頃まで存続した。

今回は明治期の神戸医学校、神戸病院に在職した3人の先達について解説した。3人は何れも他県から赴任しうち2名（佐野、江馬）は神戸病院退職後も神戸にとどまり生を全うした。2人は2年違いの東大卒でベルツ教授、後藤新平でつながり、退職後の開業地も極めて近く狩猟を趣味とした。互いにももちろん面識はあったと思うが「回想録」「自叙伝」には互いの名前はみられない。病院退

職者としての交流は強くなかったのかもしれない。もし神戸医学校が存続していたら同僚として働いていたかもしれないし、あるいは江馬の神戸赴任はなかったかもしれない。神戸医学校の廃校に伴う巡り合わせというべきだろう。

前号にもお願いしましたが、明治、大正、昭和終戦前までの資史料を医学部でも収集しています。このたび医学部図書館内に塙分館長の御好意で資史料室を設けて頂きました。将来上記の写真や史料を保存し、閲覧のために開放することを考えています。神戸病院あるいはそれ以外でも医学関係の資史料、物品があればご連絡下さい。

今回の資料収集に御協力頂き、写真の掲載を許可されました小石先生、荒尾氏、佐野先生、江馬先生および助言を賜りました近盛氏の各氏に感謝申し上げます。

（一部敬称略）